マタイによる福音書9章9-13節

●物質的に満たされ、社会的地位を得ていても、人の心には拭いがたい「魂の孤独」があるものです。古代の神学者アウグスティヌスは、「神よ、私たちの心はあなたの中に憩うまで安らぎを得ない」と語り、また科学者パスカルも「人間の心には神によってしか埋められない空間がある」と述べました。人の魂は、創造主なる神との関係なしには、本当の意味で満たされることはないのです。

●この真理を象徴的に表すのが、今日の徴税人マタイの物語です。マタイは当時の人々から「罪人」と蔑まれながらも、富と仲間にも囲まれ、社会的には成功していました。宴会を開けるほどの経済力があってもかかわらず、イエス様の「わたしに従いなさい」という招きに即座に応じたのは、彼の心の奥底に満たされない空虚があったからでしょう。

イエス様を「主」として迎えたその食卓は、それまでのどんな宴会とも異なるものとなりました。神の子イエスが共におられることで、マタイの魂の空洞は癒され、日常が神の祝福に包まれ始めたのです。そして彼は、弟子として新たな歩みへと導かれていきました。

●しかし、その光景を見たファリサイ派の人々は、「なぜ罪人と食事をするのか」とイエス様を批判しました。そこでイエス様は答えられました。「医者が必要とするのは健康な人ではなく、病人である。…わたしが来たのは正しい人ではなく、罪人を招くためである」と。神は、私たちの行いや状態を超えて、魂そのものを愛し、癒し、救おうとされるお方です。

黙示録3章20節には「見よ、わたしは戸の外に立ってたたく。…戸を開けるなら、わたしは彼と共に食事をする。」と記されています。イエス様は、魂に空白を感じる私たち一人ひとりを、今も変わらず招いておられるのです。

●本日共に歌う讃美歌456番「わが魂を愛するイエスよ」(原題: Jesus, Lover of my soul)は、そうした主の愛を情熱的に歌い上げるものです。作詞者チャールズ・ウェスレーは、『ソロモンの知恵』11:23-26の言葉を背景にこの詩を綴ったと言われています。「あなたはすべてのものを愛し、造られたものを何一つ憎まれない…あなたはすべてをあわれみます。なぜなら、それらはあなたのものであるからです。魂を愛する主よ。」

私たちがどこにしようと、どんな状態にあらうと、イエス様は私たちの魂を愛してくださるお方です。「わが魂を愛するイエスよ」というこの呼びかけは、すべての時代の人間の心の奥底から放たれる祈りの言葉です。私たちもこの讃美を心から歌い、イエス様の愛によって魂の癒しと慰めを受け取り、新たに主に従う歩みへと押し出されてまいりましょう。